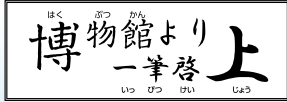


# ニタイト

☎487-2332

からの**お便り** 第13号



エゾカオジロトンボの姿を写真に収めようと町内を探しましたが、残念ながら見つからないままシーズンオフに。絶滅危惧種に出会うことはなかなか難しいものです。来年のリベンジに期待したいです。

## アイヌ政策推進交付金を活用して アイヌ文化事業を行います

博物館では、今年度から令和7年度にかけて、本町に受け継がれているアイヌ文化の保存と普及を目的とした各種事業を行います。これは国のアイヌ政策推進交付金を活用して行われるもので、アイヌ文化を学ぶ講座の実施や、本町のアイヌ文化に関わる映像作品の制作などが予定されています。随時情報発信していきますので、どうぞご期待ください。

### ～今年度予定している主なアイヌ文化事業～

- しべちゃのアイヌ文化体感！プログラム「塘路湖のベカンベを採って食べよう」「ムックリを作って演奏してみよう」「アイヌ文化のチャシ（アイヌ語でとりでの意味）に関わる講話」など
- ベカンベ（菱の実）採取用丸木舟の製作
- 標茶のアイヌ文化に関わる映像記録編集およびアニメーション制作と公開活用



世界的に戦車の配備が進んだこの時期、騎兵隊はすでに時代遅れとなっていました。米英仏軍は騎兵隊を全て廃止、ソ連軍も廃止に向けて整理中でした。日本は中国大陸での戦いを考え「騎兵第四旅団」のみを残してほかは廃止。騎兵隊は消滅目前でした。伊藤正徳著「帝國陸軍の最後」によれば、この旅団の将兵たちは、天下に残る唯一の騎兵隊として、その伝統の終わりを全うしようとする強い意気込みで士気も高く、軍馬たちの年齢が15歳と老いてはいたものの、練度の高い部隊であったと書かれています。

騎兵第四旅団が属する第十二軍は1945年3月22日より、中国の老河口（現在の湖北省老河口市）にて、飛行場占拠を目的とした電撃作戦を開始。日本軍側では「老河口作戦」と呼ばれています。日本軍は空襲を避けるため、夜間移動を行いながら中

1892年（明治25年）に徳島で生まれた山下彦平は、騎兵将校として軍歴を重ね、1941年（昭和16年）3月1日に17代目の軍馬補充部川上支部長として標茶に赴任。赴任階級は大佐で年齢は51歳でした。山下の着任後、日中戦争は太平洋戦争へと拡大。戦局は変化し、補充軍馬の供給も増していききました。標茶にいた頃の山下については、川上支部に勤務し、実際に山下本人に会った方々からの聞き取り資料が残されています。その印象は、非常に厳格で口調も激しかったことで一致しており、標茶での在任期間は1年余りと決して長くない期間でしたが、強く記憶に残る人物だったようです。山下は1942年7月まで川上支部長として勤務し、その後中央馬廠豊橋支部（支廠）に異動。戦局も極まってきた1944年8月には、第十二軍、騎兵第四旅団に属する騎兵第二六連隊長として赴任しました。

標茶に生きた人々の中には、伝記のような形で記録され、歴史にその名を残した方がいます。そんな人々の人生の物語をご紹介します。今回は前号に引き続き、標茶の軍馬補充部川上支部長として勤務し、その後日本軍最後の騎兵隊長として戦った山下彦平をご紹介します。

軍馬補充部川上支部

第17代支部長 山下彦平（後編）

くまがた

標茶近世・近代人物誌 第6話



# 標茶町昆虫図鑑



## No. 3 エゾトンボ

エゾトンボは全身が金属緑色をした中～大型のトンボです。池や沼、湿地に生息しており、標茶町でも多く見られます。北海道以外にも広く分布していますが、暖かい地域ではあまり見られないようです。

エゾトンボという名前は「蝦夷」に由来しており、やや寒い地域を好むことや、北海道にたくさんいることなどから付けられたようです。

【参考文献】 広瀬良宏ほか「北海道のトンボ図鑑」(2007) いかだ社、石田昇三ほか「日本産トンボ幼虫・成虫検索図説」(1988) 東海大学出版会

## 道東3管内(十勝・釧路・根室) 博物館施設等情報マップが新しくなりました!

道東3管内博物館施設等連絡協議会が発行している「博物館等情報マップ」が今年リニューアルされました!

このマップでは、十勝・釧路・根室の博物館や資料館などが紹介されており、標茶町博物館2タイプ・トも掲載されています!

「各館紹介コーナー」に掲載のQRコードを読み取ると、各館のホームページを閲覧することもできます。新型コロナウイルス感染症収束後には、マップを片手に博物館巡りを楽しんでみてはいかがでしょうか。

なお、マップは博物館1階にて無料配布しています。

※QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です。



国軍陣地を突破。騎兵隊は予定通りの機動力を示し、3月26日に老河口飛行場への突入に成功しています。現在のところ、この戦いによる騎兵突撃は、戦史上において最後の大規模な騎兵隊攻撃の成功例とされています。

その後、戦闘は老河口の市街地戦へと発展。中国軍の抵抗は激しさを増し、大きな犠牲を払いながらも占領に成功します。しかし米軍による沖繩戦が始まったことから、中国戦線においても守備的態勢へ移行。膠着状態となりそのまま終戦を迎えました。終戦時、山下の階級は少将でした。

老河口作戦に関する文献の中には、山下と彼の率いた第二六連隊についての記述が多く、戦史記録に残る活躍だったことがうかがえます。太平洋戦争末期に最後の騎兵部隊を率いて敵陣に飛び込み、飛行場の占領を成功させたことは、山下の高い指揮能力を示しています。

この老河口作戦については、日本と中国、双方のウェブサイトで扱われていますが、日本側と中国側で「老河口作戦」への評価が大きく異なっています。日本軍にとっては敵地での作戦勝利であったとしても、中国軍にとっては自国(特に市街戦)において多数の犠牲者を出した戦闘でした。侵略する側とされる側、立場によって戦いの見方が異なることが分かります。余談ですが、老河口の戦いは中国でドラマとして映像化されており、山下も登場しています。

戦後の山下について詳細は不明ですが、1970年4月12日に亡くなったことが分かっています。

### 引用・参考文献

- ・伊藤正徳「帝國陸軍の最後」文藝春秋新社(1960年) pp.336～339
- ・福川秀樹「日本陸軍将官辞典」芙蓉書房(2001年) p.761
- ・標茶町史編さん委員会「標茶町史通史編第二巻」標茶町役場(2002年) pp.613～655
- ・「老河口作戦(日本)」フリー百科事典『ウィキペディア(wikipedia)』(2021/08/31 12:32UTC版)
- ・「老河口作戦 最後の騎馬襲撃戦」『SURVIVAL GAME&MILITARY MAP』(<https://www.savag.net/equestrian-battle/>) 参照:2021/09/06